

三つの道極めた人生

文人の
武蔵野

三浦朱門（1926～2017年）は、文人であり教師であり官僚でした。日本には、一つの道を極める姿勢が尊ばれ、「二兎を追う者は一兎をも得ず」と戒めようとする価値観が存在しますので、違和感をもたれる方もおられるでしょう。

三浦の念頭には、旧制中学時代に接した森岡外（軍医で

三浦朱門 ⑬

文人）、水上瀧太郎（実業家で文人）ら二兎を追う作家たちの生き方があったようです。三浦を語るのに安易に「生来の文人気質」とするには、文化庁長官などの官僚仕事をこなす才もありました。

文筆業と教師稼業を両立させた三浦は、時には勤務先の日本大学の理不尽さや闘い、作品の素材を得ることもありました。その姿は「腰掛け」とは程遠く、「教師生活20年」と強調しておきなくなるものでした。

大学の文学部では南島の少



三浦が教鞭を執った日本大学芸術学部の校舎。文筆業と両立させた（練馬区で）

数言語を学び、そこで得た見識を生かして芸術家小説を描き、文学を通して植民地主義により危機に瀕する「原住民」の文化やアイデンティティーへの目を養いました。

かつての級友たちの声に耳を傾けることにより「我が故郷」としての「武蔵野」に探

究心を抱き、武蔵野にもまた「原住民」がいること、東京との関係において収奪の構造が存在することを知り、小説「武蔵野インディアン」を著しました。

「武蔵野インディアン」では、定時制高校で教えた経験などを生かして教育問題も扱

いました。その後は行政にも携わるようになり、「ゆとり教育」を推進しました。

今、日本では、将棋や音楽、各種スポーツや格闘技を中心に、ゆとり教育を享受したと言え、世代の人たちが活躍しています。他方で、国際的な学力試験の点数の低下などを理由にゆとり教育は批判され、更新されました。三浦が生きていたら、何を思うでしょう。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

*

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。